

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百五十八回 マルクス・レーニン思想の破綻（その八）

南出喜久治（令和6年12月15日記す）

【マルクス主義の本質 その4】

マルクス主義といふのは、レーニン主義と不可分一体となつて、レーニンの『国家と革命』によつて統合され、ML（マルクス・レーニン）思想となる。

ML思想は、弁証法的唯物論によつて結合してゐるので、一体のものであり、理論的に分離分解できない思想である。

マルクスに忠実な盟友として第2バイオリン奏者であつたエンゲルスの傑作とされる『家族・私有財産・国家の起源』に基づいて、レーニンとその懷刀であつたコロンタイといふ女性革命家は、蓄蔵手段となる貨幣が富の偏在を生み、家族制度が革命を阻害するとして、貨幣の廃止、家族の解体、婚姻制度の廃止、家庭教育の廃止、親、子、孫の世代隔離によつて、子どもに革命思想を植ゑ付けさせて、世代間の隔絶を行ふことによつて革命が成功するとの信念を抱いた。

今の児童相談所政策を百年以上前からロシア革命が実践してきたのである。そして、その弊害が革命の後遺症となつて、ソ連を打倒して生まれた民主制ロシアに襲ひかかつたのである。

レーニンは、いはゆる1919年テーゼ（同年3月の第8回党大会で採択された党綱領）で、理論通りに、貨幣を廃止した。貨幣を廃止する準備をすることが明記されたのである。ところが、翌年、この方針を取り消して貨幣の廃止をすることがなかつた。

それは、貨幣の機能として、交換手段、価値保存手段（蓄蔵手段）、価値尺度手段の3つの機能の他に、貨幣が権力による支配手段であることに気付いたためである。そして、貨幣を支配の手段として利用することに方針を大転換したのである。

しかし、富の偏在の元凶だつたはずの貨幣を廃止することをしなかつたことによつて、ML主義は破綻したことになる。これ以後のソ連は、共産主義国家でも何でもない。国家自身が唯一の資本家となる単なる「国家資本主義国家」となつただけである。

ソ連自身がソ連の中の唯一の資本家となることによつて、民間の資本家による資本主義

を根絶することにした。しかし、ソ連が唯一の資本家になることによって、資本主義の害悪が増幅されることに気付いてゐない。

人がコソ泥によつて苦しめられてきたのに、そのすべてを無くして大泥棒を 1 人作つて、その大泥棒に強盗をしたい放題にさせることになつたのである。

一国資本主義を社会主义だと言ひ含めて、ノーメンクラツーラといふ国家資本主義を操る資本家階級の集団指導体制によつて、国民を搾取する資本主義体制を確立したのである。

そうすると、この邪悪な資本主義を否定する思想は、体制転覆を謀る危険思想として弾圧し、排除して処刑することになるのは当然のこととなる。スターリンは、レーニンの方針を極端な形で大虐殺を行つたのであり、毛沢東も同じである。

これに対し、西側の資本主義は、国家ではない私的な資本家による資本主義の国、つまり、「資本家資本主義国家」であり、ソ連や中共などの「国家資本主義国家」と対決したのである。異なる資本主義同士の間での資本主義競争としての冷戦構造が生まれたのである。

西側では、資本家が資本の奴隸となつて資本増幅活動をすることは禁止されてゐない。資本家の天国なのである。また、これに反対する思想の自由も認められるので、ガス抜きができるのである。しかし、資本家に実力行使をすることは犯罪として処断されるので、資本家は安泰である。これが民主主義国家、自由主義国家、法の支配といふ美辞麗句なのである。

東側は強制国家であり、西側は自由国家であるといふのは、現象面だけのことであり、いづれの人民も資本主義の奴隸であることに変はりはないのである。

これは、世間でいふ、資本主義と共産主義の対立による東西冷戦構造ではないのである。単なる資本主義国家同士の対立なのである。